ＩＳ～妄想の果てに～

霧幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～妄想の果てに～

【Ｎコード】
Ｎ８６４５Ｚ

【作者名】
霧幻

【あらすじ】
女性しか動かせないＩＳを動かした少年がいた、少年の名は織斑一夏。だがその少年がＩＳを動かす前からＩＳを動かせる少年達が、、、名は双月　霧幻と神崎　無壊。この３人がおりなす物語は、、、。

注意書きや設定（色々変わるかも）（前書き）

注意書きはちゃんと読んでね。

注意書きや設定（色々変わるかも）

注意書き
注意１　主は初めて？小説を書きます。
注意２　設定？、、、色々酷いです。
注意３　主はまだ学生です、なのでいつ投稿できるか、、、。
注意４　たまに？よく日本語がおかしくなると思います間違えていたらおしえてね（笑）
注意５　あたりまえかもしれませんがなかなか妄想がひどい、、、。
注意６　オリキャラ無双です、、、。
それでもＯＫな寛大な心を持っている方は、、、。
オリキャラやその他の説明。

双月　霧幻＜ｓｏｕｚｕｋｉ　ｍｕｇｅｎｎ＞
身長１６５ｃｍ。誕生日不明。
世界で数少ない男でＩＳを操縦できる少年。双月　霧幻という名が本名なのかは不明。彼の過去も不明と、、、とにかく謎が多い。そして無口でなにを考えてるのかがあまり分からない。そしてよく女性に間違えられる。男版シャル？といった感じ。使用ＩＳ名はエグゾス。ＩＳ適正はＳ。

神崎　無壊＜ｓｉｎｚａｋｉ　ｍｕｋａｉ＞
身長１７４ｃｍ１１月１３日生まれ
同じく男でＩＳを操縦できる面倒事が嫌い（自称）口癖は「いいか？よく聞けおれは面倒がきらいなんだ」と言うわりには千冬の仕事を手伝ったり一夏の嫁ゲフンゲフン、、、女子勢にアドバイスをしたりと、、、本当に面倒が嫌いなのか？と疑問を持つほど。そして束や千冬と仲が良い。使用ＩＳ名はブリンガー。ＩＳ適正Ａ。

エグゾス（ゼイン）＜ｅｇｕｚｏｓｕ　ｚｅｉｎｎ＞
霧幻が使用するＩＳおかしな点しかない。まずなぜしゃべる？そして普通ＩＳのコアは１機につき１個のはずが３個あったり単一仕様（ワンオフ・アビリティー）能力を複数使用可能だったり拡張領域（バススロット）が無限だったり、、、色々カオス。束もお手上げ状態。さらに基本性能は今のところすべてのＩＳを凌駕する圧倒的な性能。機体カラーは主に黒と赤。

使用武器
ＲＲＳ－ＦＥＮＲＩＲ　通称　銀狼（ぎんろう）
当たれば勝ちと、、、とにかく凄まじい破壊力と弾速をほこる粒子砲。連射はできない。（そもそも１発当たっただけですらオーバーキルなのに、、、。）エネルギー消費量もやはり多い。ただ、エグゾスはＩＳのコアを複数所持しているのでエネルギー切れは基本起こさないから使用可能な武装の１つ。
ＬＷＲ－ＧＲＩＦＦＯＮ　通称　グリフォン
簡単に書くとエグゾス版　雪羅（せつら）　である。エネルギーを集中させレーザーブレードやエネルギーシールドを形成したり集中させたエネルギーを弾にし撃ちだせたりすることもできる。また威力は低いが拡散させてショットガンのように使用することも可能。エネルギー切れをおこさ（ｒｙ。
ＭＷＢ－ＫＡＲＵＲＡ　通称　刈羅（かるら）
１３個のオービット砲のことを刈羅と呼んでいる。これもエネルギーシールド（全体を囲うように使用すればエネルギーフィールド）を形成でき威力もなかなか。ガンダムのアカツキのドラグーン的な物との捉え方でＯＫ。こちらもエネル（ｒｙ。
ＨＷＢ－ＯＲＣ　通称　オルク
実弾兵器。威力はライフル以上なハンドガン（おい）連射もでき装填数もなかなか。欠点はやはり弾切れか、、、。
ＮＢ－ＭＯＯＮＬＩＧＨＴ　通称　月光（げっこう）
実剣。と、言うより刀。　零落白夜（れいらくびゃくや）　に近い能力　白牙一線（はくがいっせん）　と呼

ばれる機能付き。能力の使用にはエネルギーを消費する。

ブリンガー＜ｂｕｒｉｎｎｇａ＞
無壊が使用するＩＳ。近距離での戦闘が得意。第３世代型のＩＳ。
作ったのは束。

使用武器
罪を切り刻む者＜グラン・オルカ＞
実剣。剣というか大剣。かなり大きい。そして破壊力も大きい。
終らせる者＜エンド・イフ＞
実斧。罪を切り刻む者＜グラン・オルカ＞性能はほぼ同じただしこちらは　零落白夜（れいらくびゃくや）　に近い能力　砕く者＜グランド・クラッシャー＞　と呼ばれる機能付き。能力の使用にはエネルギーを結構使用する。ＮＢ－ＭＯＯＮＬＩＧＨＴとの違いはエネルギーの消費力で砕く者＜グランド・クラッシャー＞のほうが燃費がわるい。
レーヴァテイン
実剣。罪を切り刻む者＜グラン・オルカ＞と違い小剣である。
エルシディオン
レーヴァテインと対になる小剣。終らせる者＜エンド・イフ＞と同じ機能付き。
カイザー・ヴィエラ
ＨＷＢ－ＯＲＣとほぼ同じ性能。だがこちらはエネルギー兵器。
クイーン・ヴィエラ
カイザー・ヴィエラの実弾版ＨＷＢ－ＯＲＣとの違いはロングバレルであること（ハンドガンではなくライフルになった）そのため命中精度はＨＷＢ－ＯＲＣより良いが連射速度は少し落ちた。

注意書きや設定（色々変わるかも）（後書き）

色々設定が雑です。後々変わるかも、、、。

プロローグ～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　（前書き）

最初の注意書きは読んだかな？読んだならＯＫ。

プロローグ～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

プロローグ
「どうしてこうなった。」
少年は１人部屋で呟く、、、。
ここはＩＳ学園、、、。
ＩＳは男では使用できないという前例が覆されてから一週間まさか俺まで入学させられるとは、、、。
少し前のことである。それは久しぶりに一緒に飲んだ後のことである。
「いやーまさか千冬の弟、、、一夏だっけ？まさかあいつもＩＳを動かせるとはニュース見たときビックリしたぜ。」
「無壊、まるで貴様も動かせるみたいな口調だな、、、。」
千冬はそうつぶやいた。だからだ、ああ、、、今思うとなぜ言ってしまったんだろう、、、。
「動かせるけど？」
俺は普通に答えた。今思うと、、、酔っていたのだろう。
「は？」
千冬は冗談はよせみたいな顔をしていたので。
「嘘だと思っただろ？なら見せてやるよブリンガー！！」
まぁ、、、そんなことがありいまＩＳ学園にいます、、、。しかし制服か、、、変な感じだ。
「あ、ちなみに未成年での飲酒は基本だめだからな、お兄さんとの約束だぞ、、、俺は誰と話しているんだか、、、。」
また無壊は１人部屋で呟いた、、、。

「、、、ここが、、、ＩＳ学院。」
「ＩＳ学園ですよ霧幻。」
ここにも１人と１機この学園に入学させられた少年がいた、、、。

「あいつのせい、、、。」
さきほどの話の続きになるが、酔っていたであろう無壊と戦闘をおこなった、その時にふふ（笑）後は、、、察してください。
「まぁよかったじゃないですか家ができて（笑）」
相変わらず人を馬鹿にして、、、霧幻は心の中で呟く。
「私の楽しみの一つですからｗｗｗ」
「おまえ、、、もうどうでもいい。」
霧幻は深いため息をついた、、、。
「ちょっとそこでなにしてるの？授業はじまるよー。」
遠くから見知らぬ女子が声をかけてきた多分いや、、、きっと
「女子だと思ってますよきっとｗｗｗ」
「、、、いちいちうるさい。」
エグゾスを軽く叩いた。

「まぁすまなかったな。」
「話しかけるな。」
ここは教室の前正確には１年１組の前。
霧幻と無壊あの事件以来の再開、、、あれはいやな事件だったね。
「まぁおたがい「聞こえなかった？」、、、。」
無壊はあきらめた、、、。
「・・・というわけで、おい入ってこい。」
呼ばれたので教室に入る見ると女子女子女子、、、とすげぇなぁおい。
「まずは自己紹介からだ。」
とにかく良い印象をもたれたいな、、、なんて考えていると。
「霧幻、、、。」
一言、、、それだけか？それだけでいいのか？
「ほかにはなにかないのか？」
千冬ですらツッコミいれたよ。まぁそんなことはどうでもいいという感じで一言。

「、、、ない。」
く、クラスの空気が重くなった、、、。やりずれーな、オイ。
「そ、そうかじゃあ無壊自己紹介を、、、。」
千冬、、、ドンマイ。
「俺の名前は神崎　無壊だ。とりあえず一夏？だっけ同じ男同士仲良くやろうぜ、あとは分からないことが多いから色々教えてくれると助かる、、、。」
いや～、すくなくとも霧幻よりかは良い印象もたれたかな？
「、、、どこ？席。」
霧幻君きみはマイペースすぎやしないかい？ほら千冬もイラっとしてるし。
「ああ、、、後ろ二つあいてるから二人で決めてくれ。」
「、、、こっち。」
おい話聞いてなかったのかい？ま、席なんてどこでもいいか。
こうして俺たちの学園生活が始まった、、、。さきが思いやられる

プロローグ～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　（後書き）

なんだ、、、これ色々酷いな、、、向いてないのかなこういうの、、、そんなことを考える今日この頃です。

一夏達の視点～The viewpoint of Itika and ot

今度は一夏達？一夏視点かも、、、。

一夏達の視点～The viewpoint of Itika and ot

いきなり話を聞かされたときは混乱したな、、、。まさか俺以外にも男でＩＳを動かせるやつがいたなんて、、、どんなやつなんだろうな、、、仲良くできるといいなぁなんてことを考えていた。
少年の名前は織斑　一夏世界で初めてＩＳを動かせる男としてニュースになった。
まぁクラスの様子はと言うと、、、。
「うそ！！また男の子しかも二人も。」
「どんな人なのかなぁ仲良くできるといいなぁ。」
「でもさ？声明とかでてなかったよな？」
「このさいどうでもいいじゃん。」
なんて感じでクラスは騒がしいです。
「貴様ら、しずかにできないのか！！」
さすが千冬姉、クラスが一瞬にして静まりかえったよ。
「・・・というわけで、おい入ってこい。」
あれ？１人女性？なんてことを考えていると。
「霧幻、、、。」
あ、男だ、、、女性なんて思ってごめんなさい、、、。え？自己紹介終わり？
「俺の名前は神崎　無壊だ。とりあえず一夏？だっけ同じ男同士仲良くやろうぜ。」
「ああ、よろしくな。」
よかったこっちは仲良くやれそうだ、、、。
「、、、どこ？席。」
、、、霧幻自由人なんだなぁ。しかもかってに座ったし、、、。
こうして授業が始まった。
昼休み。

「へぇじゃあ無壊って俺より早くＩＳ動かせたのか？」
「一夏よく信じられるな。」
屋上で一夏と箒、無壊は弁当を食べていた。
「でも箒、無壊は嘘を言ってるようには見えないだろ？」
「確かに見えないがだな、まだどんなＩＳかって見てないだろ？」
「あぁそれならなクラス代表決定戦ってやつにでるからその時な。」
無壊はそう呟いた。
「あーあと霧幻もでるらしい、、、。」
はぁと無壊はため息をつく。
「変わったやつだよな。」
「変わってる？、、、あーその考えはなかった。」
無壊は納得してしまったようだ。
「私は無壊も十分変わってると思うぞ。」
「箒ちゃんは「ちゃんをつけるな変な感じがする。」手厳しいな、、、。でどこが変わってる？」
「色々だ。」
「色々？」
箒具体的に言ってやれよ無壊困ってるだろ？
「一夏、、、俺変わってるか？」
「んん？ああ、、、普通じゃないかもな。」
ごめんやっぱ箒が正しいかも。普通質問しないだろ、、、。
「変わってる、、、か。」
そうしてまた授業が始まった、、、。

一夏達の視点～The viewpoint of Itika and ot

あんじゃこりゃあああああああああああああああああ。なんか色々話し変わってるしもう、、、。

宣戦布告～Declaration of war～（前書き）

そろそろクラス代表決定戦です、、、。

宣戦布告～Declaration of war～

「いいか？よく聞け俺は面倒が嫌いなんだ、、、。」
俺の名前は無壊、普通？じゃなくて異端な高校生だ、、、。
いま俺は人生でもっとも無駄な時間の１つ、掃除のまっ最中なのだが、、、。
「面倒と言う暇があったらさっさとしぼってこい。」
箒、、、それが面倒なんです、、、。
「、、、行こうか？」
「おぉ行ってくれるのか？霧幻。」
やっとです神様、ついについに霧幻とコミュニケーションがとれました、、、。
なんてこと考えていると。
「そのかわり、、、銀狼の錆になれ。」
「おいやめろ、馬鹿。それってあれだろ？あのふふっ（笑）の事件の時に小規模なクレーターをつくった粒子砲の名前だろ？」
「うん、銀狼でお前を撃ち抜きたい。」
「いや、死んじゃうから。」
「うん、死ね。」
「いやいや、まだ死にたくな「だーかーら、雑巾をしぼりにいけぇぇぇ。」今すぐ行ってきます。」
箒に叱られるし、雑巾しぼりにいかされるし霧幻怨むぜ、、、。

「いやー箒さん怖いですねーせっかくの可愛い顔が怒ると台無しですよ。」
「な、だ、誰だっ。」
箒、、、だっけ？顔赤い。
「ここです、ほら霧幻の指。」
そういうと霧幻はその指輪？を見せた。

「まさかＩＳが？霧幻じょうだ「いや私ですエグゾスです。」え、、、えぇ～。」
箒は動揺したそれはそうだろう、、、基本は？普通は？ＩＳはしゃべりません。
「変わってる？」
「どこから変わってるか話したほうがいいか？」
「いい、、、分かってる。」
その時霧幻は少し笑っているように見えた。
「無壊に言っといて、決着、代表決定戦の時。」
箒はなぜ決着にこだわるのかな？と思いながら。
「ああ、伝えておく。」
と、言い返した。

その頃、、、。
？？？「ふっふっふっふ、私の知らないＩＳ、見に行かなくては、まっていてねちーちゃんとむっくん。」

宣戦布告～Declaration of war～（後書き）

（？？？）一発ですね？もっと分かりずらくするべきだったかな？

一夏戦終了後～After the end of an Itika gam

戦い後にしてしまいました、、、。とりあえず一夏とセシリア戦は
本編とまったく同じ展開です。そしてついに戦いが、、、。

一夏戦終了後～After the end of an Itika gam

「あー、おしかったな、、、まさか零落白夜で自爆とは。」
無壊は1人呟いた。
「次は俺か、、、はぁ面倒だ。」
そうこれは一夏が負けた後の話である。

「、、、シュール。」
「いやー、一時移行（ファースト・シフト）できたんですけどね。」
「でも遅い、、、ついにか、、、。」
「楽しみですか？」
「うん。」
「そうですか、私も楽しみですよ久しぶりに本気を出せますから。」
「亡国機業のＩＳは？」
「それよりもあの無壊さんのＩＳですね、やはり格が違いますね。」
「そう、、、関係ない壊す、、、だけだから。」
「おぉ怖い怖い。」
久しぶり、、、か。たしかに楽しみだ。

コワシガイガアル。

「一夏初めてにしては頑張ったじゃねーか。」
「そうか、千冬姉の名前は守れなかったけど、、、。」
「、、、そうか？まぁ捉え方なんて人それぞれだもんな、、、。」
「え？」
「まぁ、、、と、次俺だったな。」
「無壊。」
「あ？なんだ？」

「勝てよ。」
「約束はできねぇーな、相手は化け物だから。」
無壊もこの状況を楽しいんでいた。
「壊す、、、ねぇ？わりーがよぉ俺がてめぇをぶっ壊してやるよ。」
あー楽しみだ、、、。心の底から思ったことである。

「ついにか霧幻。」
「ああ、決着をつけよう。」
二人ともＩＳを起動させる。
「ブリンガー！！」
ブリンガーと呼ばれた機体はどことなく騎士の鎧に似ている。
色は白と青で武装はと言うと、、、。
「なにあれ？」
「大きい剣、、、だね。」
「機体と同じくらいの大きさだよ。」
会場がざわつく、、、まぁそうだよなぁ大きいよな。たいして霧幻は。
「、、、エグゾス。」
「メインシステム戦闘モード起動します。」
また会場がざわつく、、、。
「え？い、いまＩＳが、、、。」
「しゃべったよねぇ？」
「ＩＳってしゃべれるの？」
「な、なぁ？千冬姉「今は織斑先生だ、、、。」あ、織斑先生ＩＳが。」
「聞いたことがないな、、、しゃべるＩＳか、、、。」
「？箒はあまり驚かないな。」
「まぁ私は知っていたからな。」
なんて話をしてるなかそのＩＳは姿を現した。
色は黒と赤で無壊のブリンガーと対になっている。

デザインは大きなブースターが翼のようになっており、なんとなく堕天使という言葉が似合う見た目？である。
そして武装も無壊が近距離で霧幻が遠距離と言ったところか、、、。
そして目を引くのは右手の巨大な銃、、、銃と言うかブラスター？粒子砲。
「あいかわらずでけぇ武装だなぁ。」
「その言葉そのまま返す。」
たしかにな、、、俺のもでけぇか、、、。
「用意はいいか？」
「、、、こい。」
「じゃあ、、、いくぜえええええええええええええ。」
霧幻は距離をとり左腕の盾のような装備からエネルギー弾をはなつ。
「ちぃ弾速が早くて避けにくい。」
かなり早いしかも一発一発の威力も高い。
「刈羅。」
「ＭＷＢ－ＫＡＲＵＲＡインストール。」
きたかあの時の１３個のビット。
１３個のビットが逃げ道をなくすように囲いながら射撃してくる。
「刈羅と踊っていろ、、、そしてさようなら。」
霧幻は右腕の銀狼のトリガーを引いた。
グガァァオという音が会場に響き渡るそして、、、。
「当たるか！！」
無壊は間一髪のところで回避した、、、が。
地面に当たった瞬間大爆発、会場がその衝撃でゆれる。
そのあと会場をみると、、、。
「うそでしょ、、、。」
「く、、、クレーターができてる。」
小規模だがクレーターと呼ぶのにふさわしい円環状の山脈ができている、、、。
「、、、はずした。」

「はずした、じゃねーだろ殺す気か？」
「うん。」
笑顔がまぶしいなコンチクショー。
「次は、、、ない。」
「ちっ、、、。」
また刈羅とグリフォンの弾幕、、、そろそろこっちも攻めたいな、、、。
「いくぜ、ブリンガー。」
「な、速度がいきなり早く、、、。」
「瞬時加速知ってるだろ？」
瞬時加速で一気に無壊は距離を詰める。
「この距離なら、が、がはっ。」
距離を詰めた瞬間グリフォンをブレードモードにし、逆に無壊に大ダメージを与えた。
「近距離も得意だ、、、銀狼のチャージングはそのままで月光を、、、。」
「ＲＲＳ－ＦＥＮＲＩＲを収納ＮＢ－ＭＯＯＮＬＩＧＨＴをインストール。」
月光と呼ばれた刀は刀身は黒いが青く光り輝いている。
「なんとも幻想的な刀だことだ、、、。」
そした近距離戦にもちこむが、、、。
強い、、、グリフォンと月光のラッシュに押されている、だが。
「うおぉぉぉぉらあぁぁぁぁ。」
グラン・オルカでグリフォンごと霧幻を薙ぎ払う。
「な！一撃でここまでのダメージ！？」
霧幻は動揺した、過去ここまでのダメージを自分に与えた者はいなかったから。
「おらぁどうしたぁぁぁぁ。」
「くっ、、、近距離では力負けしている、、、。」
月光で斬りかかってもあのでかい剣で薙ぎ払われる、なら距離を離

して！！
「逃がすかぁぁぁぁ。」
くっ瞬時加速のせいで距離を離せない、、、。
正直イラっときた、、、。
「刈羅、、、。」
「この距離でか？自分にもあたるんじゃ？」
「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）発動、、、悪夢の宴（ディアボリッカイジ）。」
「ワンオフ・アビリティーだと？ってありかそんなの！！」
刈羅の弾幕がミサイルのように追尾してくる、、、。
「さらにおまけだ、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）発動、、、重力異状（グラヴィトン）。」
な、、、こんどは機体が重く、、、。
「避けられねぇ、、、。」
刈羅の弾幕が無壊を容赦なく襲う、、、。
おいどういうことだ、なぜ単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）を複数使用できる、、、そしたら単一仕様じゃねぇだろうが。
「銀狼チャージ完了、悪夢の宴（ディアボリッカイジ）発動中だから避けられないな、今度こそさようなら。」
「おいこのタイミングで撃つ奴がいるかぁぁぁぁ。」
「壊れろ。」
また会場にグガァァオという音が響きわたる、しかも今度は追尾機能付き。
「無壊！！千冬姉、早く止めさせないと無壊が死んじゃう。」
「だめだ、、、霧幻の回線につながらない。」
「まさか、わざと切ったのか？」
会場がまたざわつく。
みんなもうやめてなど言ってるが。
「知るか、死ね。」
霧幻にとってどうでもいいことだから、、、。
「ちったぁ自重しやがれぇぇぇぇ。」
無壊はエンド・イフを持ち、叫んだ。

「モードグランド・クラッシャー、吹き飛びやがれぇぇぇぇ。」
グゴォォォォガガギィィィィという騒音とともに相殺した、、、
霧幻の最大の一撃を。
「な！？銀狼の一撃を相殺した？、、、化け物か？」
だが無壊は相殺するさい機体のエネルギーをすべて消費してしまった。
「はぁ、、、はぁ、、、いいかよく聞け俺は面倒が嫌いなんだ、、、
死ぬなんて面倒なことになるくらいなら負けてやるさ、、、。」
「、、、お前の勝ちだ、、、俺の最大の一撃を相殺したから、、、。」
「そうか、、、じゃあ俺の、、、か、、、。」
そこで無壊は気絶した、、、。

一夏戦終了後～After the end of an Itika gam

初めての戦闘シーン、、、。もう少し勉強しないとな、、、。アドバイスとかあったらうれしいです。

絶対禁止～It forbids absolutely.　～（前書き）

戦い後です。ついに？あの人が登場します。

絶対禁止～It forbids absolutely.～

何日寝てたんだろうな、、、。
無壊は目開けると知らない場所にいた。
多分保健室とかだろうと推測し、また寝ようとした。
「まだ寝たりないか？二日も寝ていたんだぞ、、、。」
？声がした気が、、、しかもとっても殺意てきななにかを感じるんですけど、、、。
「お、織斑、、、先生？」
「無壊、、、言いたいことは分かるよな？」
最悪だ、、、無壊は心から思った。
怒ってるのは当然だよなぁあの試合のとき誰にも邪魔されたくなかったから回線を切っていたのだから、、、てかよぉ、普通使うか？
あんな殺戮兵器、、、と、とにかく謝っとかないと、、、殺される。
「すすすまなかったこん「どれだけ心配したと思ってる！！」、、、、へぇ？」
いや、予想斜め上でした。
「分かっているのか？あんなのまともにくらったらお前でも、お前でもな、、、。」
「すまなかった、、、。」
久しぶりに見たな、、、動揺している千冬、たしか、、、あの時の事件以来だったな。
無壊のいう事件とは、数年前一夏がさらわれた時のことである。
あの時の千冬の動揺っぷりはすさまじかったな、、、。いつもの威厳のある千冬はどこに行ってしまったんだ、なんて考えるほどだった。今なら分かるが、いや俺も冷静になっていれば分かったのかもしれないな、動揺するのも当然だ、、、たった1人の家族、、、なんだからな。
「分かればいいんだ、、、。」

「、、、霧幻は？」
「あいつか？あいつは、、、。」
と、千冬が言うとドアが開く音がした。
多分、、、流れからして。
「やっぱりか、、、今はたた「分かってる。」ならいいけど。」
霧幻だった。手には、、、リンゴ？
「買ってきた、もういい？」
「霧幻、貴様がここまで派手にやったんぞ？わかっているのか？」
「、、、まだあるの？」
「あたりまえだ！！あと、あの銀狼は禁止だ。」
「絶対？」
「絶対だ、ほんとうならＩＳを取り上げるところなのだが、、、。」
「なのだが？」
無壊も疑問に思っていた。千冬にしてはあまい判断だと。
「そうすると暴れるぞってこいつのＩＳがな、、、。」
まさかとは思うが、、、。
「無人で動けるのか？」
「動けてしまうんだ、、、。」
もう人いらねーじゃんなんて考えているとエグゾスがしゃべりだした。
「いや要りますよ、霧幻がいないと単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使えませんから。あとエネルギー管理とか私でけでは結構難しいんですよ。」
このエグゾスってやつは、、、あの時もだったな、、、。
「てか、、、考え読めるのか？「いいえ、読めませんけど？」、、、。」
即答かい、しかもノーって答えたよこの子。
「なぁ、疑うようでわりーがよぉどうしてもそのての能力を持っているようにしか、、、。」
「同意見だが、、、ない、、、らしい。」
霧幻が言うなら本当なんだろうな、、、。

「おめぇも苦労してるな。」
「慣れた。」
「で、霧幻、私の話はわかったのか？」
「、、、うん。」
「うん、じゃない。」
「、、、はい。」
「心配しないでください、このエグゾスが絶対に使わせませんから。」
いや、余計心配だから。
「あぁ、、、たのんだぞエグゾス。」
ほら千冬もちょっと複雑な顔してる。
「まぁなんだエグゾス、頼んだぞ。」
「あいにく女性以外の命令は聞く気はないんで、あ、無理なお願いもありますけどね。」
うぜぇぇぇぇ。
「てめぇ、、、。」
「イラッとしました？ねぇいまどんな気分？、ＮＤＫ、ＮＤＫ。」
がぁぁぁぁ壊してぇぇぇぇめちゃくちゃいらいらするんですけどこのＩＳ。
「エグゾス。」
「はいはーいｗｗｗ」
霧幻もさすがにまずいと思ったのかな？
「はぁ、、、疲れた。」
「私もだ、、、。」
もう寝ようと思った時。
「ちぃぃぃぃぃぃちゃぁぁぁぁぁぁぁぁん。」
この声、、、ま　さ　か。
「束？こんな「束さんダーイブ。」はぁっ。」
束は千冬に飛びつこうとしたが、飛びつく前にチョップされてしまった（笑）。

「痛い、、、束さん泣いちゃうよ、、、。」
えーと、、、説明が必要、、、かな？
このいかにも不思議の国のアリスにでてきそうな格好の人は篠ノ之
　束、ＩＳを初めて開発した人物でいわゆる天才である。天才、、、
だよな、、、。
「おう、束久しぶりだな。」
「やぁむっくん、久しぶりだね。あいかわらず疲れてそうだね。」
いや、実際疲れてます。かなり。
「束さんはこんなに元気なんだよ？だからむっくんも元気にならな
きゃ。」
意味わからん。
ちなみにこの人は昔からこんな感じである、、、変わらないなぁ。
「で？なにしに来たんだ、まさか私たちに会いに来たとかじゃない
だろ？」
ああ、確かに。さすが千冬だ。
「実は、このＩＳ学園にわた「はいはーいそのＩＳはここでーす、
エグゾスでーす。」ありゃ束さんが言おうと思ったのに、、、。」
だから、なんで言う前に分かるんだ。
「と、いうわけでそのＩＳを「帰ります。」って逃げるなー。」
霧幻は窓から飛び降りた。
「おいって、、、展開早いな、、、。」
ＩＳを展開させて、、、。しかし霧幻もか、、、。
「束さんから逃げられると思うなー。」
そして束もＩＳに近い何かを展開させて霧幻を追いだした。
「千冬、、、。」
「なにも、、、いうな。」
二人はため息をついた。

くそっ、、、今日は厄日だ、、、。

霧幻はエグゾスを展開させＩＳ？を展開させている束から逃げている。
「ふっふっふっ束さんから逃げられるとおもうなー。」
たしかに、、、なら。
「逃げられないなら。」
銀狼を構える。撃たなければいいんだろ？
「ストップ、ストープそれは反則ぅ。」
やはりか、、、銀狼の威力を知っている、、、か。
「束さんは暴力反対派だよ～。」
意味がわからん。
「ダメですよ霧幻、禁止されてるんですから。しかもこんな可愛い女性にむかって撃つだなんて絶対ダメです。」
こいつもこいつで、、、。
「撃つ気はない、、、変なことをしなかったら。」
「じゃあ束さんに「断る。」うぅぅケチー、けちけちけちー。」
ガキか、、、。
「じゃあなんで束さんに見せてくれないの？」
そんな目をされても、、、。
「信用できない。」
「、、、どこが？」
「全部。」
まじめに答えたつもりなんだが、、、。
「ひっどーい、世界中のみんな知ってる天才、束さんだよ？」
「どうでもいい、、、。」
「にゃぁ、、、。」
しょげた、、、。
「霧幻今すぐ謝りなさい、今すぐ。」
「なんで？」
「いいから今すぐ。」
「理不尽な、、、ごめん。」

「じゃあ、見せてく「ごめん」、、、やっぱり意地悪。」
束はなにか思いついた表情になった。
「じゃあじゃあ、どうしたら信用してくれる？」
以外にも普通な質問、、、。
霧幻は少し考えこう答えた。
「すくなくとも、ＩＳにしか興味がない奴は信用できない。」
束はきょとんとした。
「ふぇ？束さんは君にも興味あるよ？」
そして霧幻もきょとんとした。
「いま、、、？」
「だって君の過去とか調べようとしたけどでないんだもん。束さんそれが気になってきちゃったんだから。しかもまったく知らないＩＳだよ？見に行くしかないじゃん。」
本当は逆だろ、、、。
「わかった「じゃあ見せてくれるの？」考えとく。」
「えぇ～。まだ駄目なの～。」
「、、、。」
「今度は無視！？ひどいよ～。」
なんか疲れた。

次の日

「よっ、あの後どうなった？」
無壊か、、、。
「大変だった。」
「わぁ、、、言われなくても想像できる。」
俺も昔はよく振り回されたもんなぁなんてことを考える。
「いないってことは見せ「見せてない。」おーがんばるぅー。」

しかし、今日の霧幻はよくしゃべる。普段もこのぐらい話せるようになったらいいのになぁ。
「おはよってなんだか久しぶりなきがするな、霧幻が他の人といるの。」
ちなみにあの試合のあとから霧幻に話かける人はかなり減りました。
理由は、、、まぁわかるよね？
「一夏、そういえば俺は聞いてないんだけどクラスの代表って誰になったんだ？」
「ああ、それ「一夏さんになりましたの。」セシリア、俺が説明しようとしてたんだから。」
そこにはセシリアがいた。
あれ？たしかセシリアと一夏って仲が悪かった気が、、、しかも一夏さん？
「霧幻、、、負けたのか？」
「いや、霧幻は辞退したんだ。」
「そうなのか？」
「めんどくさかったから、、、ふぅあぁぁぁ眠い、、、。」
霧幻、御愁傷様、、、。

昼休み

「いや～、気まずい。」
「あぁ確かに、男少ないし、、、気まずいよな？」
そこじゃない、、、。
いま、一夏と箒、セシリアに俺、、、と。
「一夏？本気で言ってるのか？」
「ん？なにが？」
いや、気づけよ。この二人おめぇに気があるだろ？

まさかこいつ唐変木か？
「二人とも、、、頑張れよ。」
「「な、何の話だ（ですの）」」
二人とも同時に答える、、、青春してるねぇ。
「どうしたんだ？箒、セシリア？」
今ので気づかないとは、、、これはかなりの唐変木だな、、、。
無壊は気まずさを感じながら四人で弁当を食べた、、、。

その頃霧幻は、、、。

「しつこいと嫌われるぞ、、、。」
霧幻は屋上で弁当を食べていた、、、束と。
「じゃあ「見せない。」ちっがいまーす。」
じゃあ、、、なんだ？
「君は「霧幻、名前も分からないのに話しかけるな。」ひっどーい。」
またか、ぎゃーぎゃーうるさい。
「じゃあむっちゃんは「むっちゃんはやめてくれ。」でもむっくんだとかぶっちゃうし、、、。」
「霧幻。」
やっぱり疲れる。
「しょうがないなぁ、、、特別だよん。」
なにがだ？
「じゃあ霧幻はどうやってそのＩＳを手に入れたの？」
、、、結局ＩＳ関連じゃないか。
「自分で、、、。」
「自分で？、、、まさか作ったとかいわないよねぇ？」
一応天才か。

「嘘だぁー、、、束さんは認めません。」
親か、、、。
「信じるかは、、、自由。」
「うーん、、、じゃあ、信じる。」
変わってる、、、普通は信じない、、、。
「少し、、、見直した。」
「じゃあ、昨日聞かせてくれなかった霧幻の「チャイム、、、行かなきゃ。」後で聞かせてね〜。」
「気が向いたら、、、。」
霧幻は屋上を後にした。

「霧幻か、、、束さん気にいっちゃったからね。」
その時の束はいつも以上に楽しそうだった。

絶対禁止～Ｉｔ　ｆｏｒｂｉｄｓ　ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ.　～（後書き）

長くなってしまった、、、そしてすこしフラグを、、、。
誤字などあったら教えてくれると助かります。
ちなみに銀狼とグリフォンは基本武装でエグゾスを展開させるとその二つの武装も自動で展開？転送されます。

クラス代表就任パーティー～Ｃｌａｓｓ　ｒｅｐｒｅｓｅｎｔａｔｉｏｎ　ａ

最初の投稿速度はなんだったのだろうか、、、。
そして、個人的に好きな話です。（とくにアニメ版はすごかった。）

クラス代表就任パーティー～Class representation ac

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう、、、。
織斑、オルコット、神崎、霧幻。試しに飛んでみろ。」
あ、なぜ千冬が霧幻のことを双月と呼ばないのかというと、双月とよんでも一切返事をしないからである。
まぁ自己紹介の時も「霧幻、、、。」と言っていたしな、、、でもよぉ、名前でしか反応しないのも困ったものだよな、、、。
ま、とりあえず、、、。
「わかりましたわ。」
「りょうかーい」
「、、、。」
ISが展開される、、、。一人を除いて。
「ええーと、、、たし「なにをしているんだ織斑!!」す、すみません。」
少し時間がかかったが一夏もISを展開できた。
しかし一夏いくらなんでも時間かかりすぎだろ、、、。

とりあえず4人ともISを展開できた。

「、、、よし、飛べ!!」
「はいっ!!」
「いくぞ、ブリンガー!!」
「、、、エグゾス。」
「よーし、いくぞっ!!」

一番は無壊、二番目は霧幻、三番目はセシリア、そして四番目は、、、。

「なにをしている織斑、ブリンガーならまだわかるがスペック上の出力では白式の方がブルー・ティアーズやエグゾスよりも上なのだぞ？」
「そう言われても、、、たしか、、、自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？、、、よくわかんねぇ、、、。」
「おい一夏、イメージはしょせんイメージだ。」
「自分のやりやすいイメージを模索するほうが賢明でしてよ。」
「と、言われても、、、なんかコツとかないのか？そもそもなんでＩＳが浮いてるのかすらまだ理解できていないんだぞ？なのにできるはずないだろ？」
「と、言われてもなぁ、、、。」
「その、、、よろしければ放課後に指導してさしあげますわよ。」
「はぁ？」
おい一夏、はぁ？じゃねぇーだろ。
「その時はふ「織斑、オルコット、神崎、霧幻。急降下と完全停止をやってみせろ。」りょ、了解です。」
いやー千冬やってくれるなぁ、、、。
「まぁ、りょうかーい。」
無壊、霧幻、セシリアは地上に向かって急降下をした、結果は三人とも成功。
霧幻は土埃ひとつたてずに止まった。
どんな化け物だこいつ？なんて考えていると。
「私は優秀ですから。」
と、エグゾスは答えた、、、。
だから人の考えを読むなこの野郎、、、。
なんて馬鹿をやっていたら、、、。
ドォォォォゴォォォォと爆音に近い何かが響き渡った、、、。
音がするほうを見ると、、、。
「一夏さん！？」
「なにをしているんだ、、、。」

「おお、すげぇなぁ。」
「、、、シュール。」
くすくすと霧幻が笑ってるー。すげー。
「出力は銀狼のほうが上ですね。」
「いや、競うなよ洒落にならねぇーから。」
さきほどの音は一夏がクレーターを作り上げる音だった、、、。
小規模だがクレーターと呼ぶのにふさわしい円環状（ｒｙ

みんな駆けつけたのだが、、、。

「いってぇ、、、死ぬかと思った、、、。」
まぁ元気そうだ。
「馬鹿者、グラウンドに穴をあけてどーする。」
千冬すこし笑いをこらえてないか？
「すみません、、、。」
「なさけないぞ一夏、私が教えてやったことをまだおぼ「大丈夫ですか？一夏さん、お怪我はなくて？」」
「あ、あぁ、、大丈夫だけど、、、。」
いやーこの唐変朴め、えぇーいもげろこんちくしょう。
「ぷっ、、、くっくっく、、、。」
霧幻まだ笑ってるし、、、。

まぁ、こんな感じで今日の授業はにぎやかでした、、、。
あ、そうそうグラウンドを一夏が直しているときに聞いたんだが、
今日一夏がクラス代表になったからそのお祝いをやるらしい。
霧幻は、、、来ないよなぁ。

放課後。

「おーい霧幻、今日一夏クラス代表就任パーティーやるらしーぞー、でるのかー？」
一応聞いておいたのだが、、、。
「俺がいると楽しめないだろ？、、、だから行かない。」
と、返されてしまった、、、。
「そんなこと「ないなんていいきれないだろ？」ま、まぁ。」
まぁわかっていたが。
「さびしくないか？」
「慣れてる。」
「そうか、、、。」
それ以上言葉が思いつかなかった。
と、今度は霧幻が。
「なぁ？あの兎の撃退方法知らない？」
なんて話をふってきた、なんか霧幻から話をふってくるなんて珍しいなぁ。
「あぁ？束のことか？まだ諦めてなかったのか、まぁあいつは飽きっぽいからそのうち来なくなるんじゃないか？」
「、、、そう。それはよかった。」
「んん？あぁ、よかったな。」
気のせいか少しだけ寂しそうに見えた気が、、、気のせい？だよな。
こうして俺は霧幻と別れた。

そして、、、。

「「「織斑君クラス代表就任おめでとー。」」」
パンパンとクラッカーの音。

いやーいつ聴いてもいい音だ、パーティーって感じがする。
「「「織斑君、おめでとー」」」
パチパチと拍手、、、いやー賑やかだ。
「なぁ？なんでセシリアは辞退したんだ？」
いや、予想はついてるんだが。
「まぁ、たしかに勝負はわたくしの勝ちでしたがしかしそれは考えてみれば当然のこと、なにせわたくしがあいてだったのですから。」
おうおう、言うじゃねーか。ただ惚れただけなのに？
なんてことを思う無壊だった。
「それで、、、大人げなく怒ったことを反省して一夏さんにクラス代表をゆずりましたの。」
そしてみんなで男子をもちあげなきゃなんて話をしている、、、。
こっちに飛び火しなきゃいいが。
「人気者だな、、、一夏。」
あーあ、箒むくれてる、、、。
「そう見えるか？」
逆に問うが見えないか？まぁいい薬になるかな？なんて考えていると。
「なら無壊でもいいじゃないか？」
一夏、、、なんてことをいいだすんだお前は。
「いいかよく聞け、俺は面倒が嫌いなんだ。クラス代表なんか絶対やらん。」
「えーじゃあ、、、俺か。」
霧幻はまずいと思ったんだろうな。
「まぁいいじゃねぇか。」
「他人事みたいに言いやがって、、、。」
まぁ他人事だし（笑）
「どうもー新聞部でーす。」
おおそういう部活もあるのか？
「取材いいですか？」

まぁみんなＯＫだすよな、、、。
「えーとまずは一夏君、クラス代表になった感想とかお願いできないかな？」
おおそしてべたな質問。
「え？ええ、、、と、、、その、、、が、がんばりたいです。」
しーん、、、場の空気が凍りついた、、、。
「じゃ、じゃあ無壊君に質問ね？」
おい、何もなかったみたいな感じにするんじゃねぇ。
「無壊君はいつＩＳを動かせるようになったのかな？あと声明がなかったんだけどどうして？」
「あー、政府は知らなかったからな、、、あと二年ほど前からかな？（適当）」
「じ、じゃあまさか一夏君より早くＩＳを動かせたってこと？」
「そうなるな、、、面倒なことになりそうだったからばれないように生活してきたんだ、、、まぁ織斑先生に見つかったのが運のつきでした。」
あーあーみんなざわつくな、、、。
「いやーそれは残念でしたね、じゃあ最後になにか一言コメントをどうぞ、期待してますよ。」
難しい要望だな、、、いつも通りでいくか。
「いいかよく聞け、俺は面倒が嫌いなんだ。面倒な奴は誰であろうとぶっ潰す、、、以上だ。」
「おお、こういうのを期待してたんですよ。」
そうっすか。
「あ、あと霧幻君いますか？」
場が凍りつく、、、禁句だぜ、、、それ。
「あいつは調子が悪いらしくて来なかったんだ。（適当）」
「そうですか、、、残念です。」
知らないって怖いね、、、。
「じゃあ、、、最後に専用機持ち三人の写真を撮らせてもらいまー

す。」
いや、、、それは、、、。
「すみません、俺写真に写らないんで。（適当）」
「無壊君っておもしろいね。これも書いておこう。」
いや、うけ狙ったわけじゃないから。
「じゃあ、、、セシリアと一夏君二人で撮るねー。」
まあ、よかったなセシリア。
「じゃあ撮るよーはーい。」
パシャっとシャッターがきられたのだが、、、。
「なぜ、全員はいってますのー。」
いやー予想はしていた、、、。
「まあまあまあ」
「セシリアだけ抜け駆けは、ないでしょう？」
だよねー。

こうして一夏クラス代表就任パーティーは終わった、、、。
一方、霧幻はというと、、、。

「またか、、、。」
霧幻の部屋の鍵が開いていた、、、。
「やっほー束さんだよー。」
なんとなく日課になっている気がする、、、。
「また、、、不法侵入？」
「ちゃーんとちーちゃんに鍵もらってきたよ？」
なにしてやがるあのやろう、、、。
「そう、、、。」
「ねーねー霧幻、今日はパーティーあるって聞いたげど行かなくていいの？」

「興味ないから。」
「ふーん、もしかしてパーティーより束さんの「だから、興味がないだけ。」えー、つまーんなーい。」
やーやーぎゃーぎゃーうるさい、、、。
さっきの話題を持ち出してみよう、、、。
「、、、無壊が言ってた。」
「ふぇ？なにを？」
「飽きっぽいんでしょ？」
「うん、飽きっぽいよ。」
「そう、、、じゃあす「大丈夫、霧幻といるの楽しいから。」、、、、どこが？」
心の底から思った。俺といて何が楽しいのか、、、。
「具体的には言えないけど楽しーよ。」
まったく、、、信じられない、信じれない、だけど、、、いや、、、。
「そう、変ってるね。」
「えー霧幻のほうが変ってるよー。」
「、、、わかってる。」
変ってるんじゃなくてこういう存在なのだから、、、。

普通じゃないのが俺なんだから、、、。

だって、、、俺は、、、。
「どうしたの？」
「、、、なにが？」
「なんか、悲しそうだよ？」
「、、、そう。」
「なにか嫌なこと言っちゃった？もしかして変ってるって言ったか

ら？」
「違う、、、すこしね、、、ごめん。」
「ありゃ？なんで謝るの？」
「エグゾス勝手に見てもいいから、、、。」
エグゾスを置いて部屋を出て行ってしまった。
「ちょっと霧幻、、、。」
しばらく束は黙っていた、そして束はエグゾスに質問した。
「ねーねー、えっきゅん聞きたいことがあるんだけど？」
「はい、答えられる範囲であれば、、、あといつえっきゅんになったのですか？」
「なにかまずいこと言っちゃったかな？」
「答えるならＮＯ、です。と、いうかスルーですか。」
「じゃあ、なん「照れ隠しじゃないですか？」え？」
「でも。」
「それか知ってしまったときのことを考えてしまったんでしょう。」
「知る？えっきゅんを解析しても束さんは遊びにくるつもりだよ？」
「いえ、そのことではなくて、、、。」
束は何のことなのかな？と考えている。

実験体ｌＡＺ－００１、、、。

それが、最初の名前。

そして、父親がつけた名前（ナンバー）である。

クラス代表就任パーティー～Class representation a

あれ？なんか中二病全開＋暗い話になってもうた、、、。
誤字やここはこういう表現じゃないの？みたいのがあったら教えて
くれると助かります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8645z/

ＩＳ～妄想の果てに～

2011年12月29日16時48分発行